vinetur

フランチャコルタの未来は広域景観の保護次第だと登壇者らが警鐘

Festival Franciacortaで、計画の空白、気候ストレス、Torbiere del Sebino湿地が、フランチャコルタの将来を占う試金石として挙げられた。

2026年9月22日（火）



フランチャコルタの未来は、ブドウ畑に何を植えるかだけでなく、その周囲のより広い景観をどのように保全し、再構築するかにも左右されると、今年のFestival Franciacorta in Cantinaの一環として北イタリアのロデンゴ・サイアーノで開かれた公開討論会で登壇者らは述べた。

この対話は、食品、ワイン、マーケティング、観光の専門教育に特化した高等技術機関Academy Symposiumを擁する旧フランチェスコ会修道院で行われた。ワインライターで美術史家のArmando Castagno、ベルガモ県とブレシア県を管轄する考古・美術・景観監督局のFiona

Colucci、Torbiere del Sebino自然保護区の理事長でブレシア大学の水理工学教授Marco Pilotti、そしてコンサルティング会社Studio Agronomico Sataの共同創業者である農学者Pierluigi Donnaが参加した。

この催しは、イタリアを代表するスパークリングワイン産地のひとつであるフランチャコルタが、経済活動、観光、環境保護、歴史的保存、気候変動への適応のバランスをどう取るかという高まる圧力に直面するなかで開かれた。ロンバルディア州の伝統方式スパークリングワインの原産地呼称を保護し、Emanuele Rabottiが率いるFranciacorta Consortiumは、景観をフェスティバルの中心テーマの一つに据えた。

登壇者らは、この問題はブドウ畑の管理だけにとどまらないと説明した。フランチャコルタでは、景観はワイン産地そのもののアイデンティティと結びついているが、都市計画、建築、交通、水系、生物多様性、歴史的建造物、そして地域住民や来訪者の期待によっても形づくられている。

Castagno氏は、人々が景観を理解する仕方は、地理だけでなく美術、写真、文学にも大きく影響されると述べた。景観は単なる物理的な背景ではなく、時間をかけて形成される文化的イメージでもあると同氏は主張した。フランチャコルタでは、そのイメージは現在、ワイン生産と、自然、職人技、味、地域の知識が一体となる土地という考えと強く結びついているという。

この見方が重要なのは、フランチャコルタの国際的評価が、ボトルの品質だけでなく、ワインツーリスト、投資家、住民が訪れる地域の視覚的・環境的な一体性にも、ますます左右されているからだ。Castagno氏は、イタリアのいくつかの農業地帯では卓越したワインや食品が生産されているものの、道路で通り抜けても土地の個性がほとんど見えてこないと述べた。同氏の見方では、フランチャコルタの未来は、地元機関と生産者が景観を二次的な問題ではなく共有責任として扱うかどうかに、部分的にはかかっている。

Colucci氏は、景観保護は少数の記念建造物や景勝地を守ることに還元できないと述べた。人々は個人的な経験や文化を通じて景観を捉えるが、公的機関はそれをどのように統治するかについて実務的な判断を下さなければならないという。フランチャコルタでは、直接的な文化財保護の対象となる地域は比較的限られており、そのため大半の責任は自治体の計画手段を通じて地方政府に委ねられていると同氏は述べた。

同氏は特に、ロンバルディア州の自治体が用いる地域政府計画であるPiano di governo del territorioに言及し、開発の方向を形づくるうえで極めて重要な手段だと述べた。しかし、そうした計画はしばしば長年にわたる妥協の産物であり、とりわけ土地所有者や地方行政が戦略的に重要な地域での建設を認めるよう圧力を受ける場合にはそうだという。

州レベルでは、Colucci氏によると、数年にわたる作業にもかかわらず、ロンバルディア州はなお、イタリア文化省と合意した完成版の景観計画を持っていない。そのような広域枠組みがなければ、自治体の境界を超えて広がるアイデンティティを持つ地域で、成長を調整して管理することが難しくなると同氏は示唆した。また、フランチャコルタの優先事項の一つは歴史的な貴族邸宅や古い建物の保護であるべきだとも述べ、公共介入は不適切な工事がすでに始まった後にしか行われないことが多いとした。

議論の多くは、景観と環境保護に関するイタリアの法的枠組みに集中した。Castagno氏は、第二次

世界大戦後に書かれたイタリア憲法第9条が、景観および歴史的・芸術的遺産の保護を共和国の基本原理の一つに位置づけたと振り返った。同氏は、その選択が、こうした保護は単なる地方の義務ではなく、国家の責務であるべきだという考えを反映していると述べた。登壇者らはまた、2022年に採択された憲法改正で、将来世代の利益も含めて、環境、生物多様性、生態系の保護が明示的に加えられたことにも言及した。

Colucci氏は、イタリアの公共政策では長らく「景観」と「環境」が別個のものとして扱われがちだったが、実際には両者は深く結びついていると述べた。フランチャコルタのようなワイン産地では、その区別を維持するのは特に難しい。同じ土地が、生態学的、農業的、文化的、経済的な機能を同時に果たさなければならないからだ。

Pilotti氏は、フランチャコルタ近郊にあり1984年に自然保護区に指定され、ラムサール条約の下で国際的にも認められている湿地、Torbiere del Sebinoの事例を通じてこの点を浮き彫りにした。同氏によると、保護区の存続は人間による管理、特に水質と水利網の保全に大きく依存している。かつて泥炭と粘土の採取に使われていたこの地域は、現在では生物多様性と観光の面で価値が認められ、年間およそ60,000～70,000人の来訪者を集めている。

Pilotti氏にとって、泥炭地は、地域が自然地域と生産地域を別々のシステムとして扱うことはできない理由を示している。経済活動は依然として不可欠だと同氏は述べた。人もまた景観の一部であり、そこにとどまるには雇用と機能するコミュニティが必要だからだ。課題は、その発展が、土地が依拠する環境システムを破壊しない形で導かれるようにすることだ。

Donna氏は、気候変動が、手入れの行き届いたブドウ畑の景観がどう見えるべきかという視覚的な概念も変えつつあると述べた。長年、ブドウ栽培における美しさは幾何学的な整然さ、均一な列、厳密に管理された畑と結びつけられてきたという。しかし生産者が、木陰、生物多様性、より複雑な生態系を通じて回復力を高めようとするなかで、そのモデルは見直されつつある。

同氏は、この変化によってフランチャコルタは、ブドウ畑の内外でのアグロフォレストリーの形態へと向かいつつあると述べた。ブドウ畑の縁やシステム内に樹木、低木、生け垣を植えることで、暑さの影響を和らげ、生物多様性の回廊をつくり、耕作地を近くの森やその他の生息地とつなぐことができる。Donna氏は、厳格な単一栽培に代わる手法であり、より暑く予測しにくい気候に適応するための地域の手段の一つだと説明した。

Donna氏によれば、フランチャコルタは、コンソーシアム、ワイナリー、研究機関、Fondazione LGHのような外部組織の間での協力の度合いが際立っている。同氏は、その協力が、従来の土壌・気候分析を超え、生物多様性の測定や、肥沃度と回復力に関わる土壌生物の研究を含む新たな学際的ゾーニング研究の立ち上げにつながったと述べた。

同氏によると、この研究はブレシア大学とミラノ大学と連携して進められており、30年後あるいは50年後にどの植物種が地域条件に適しているかを特定するための予測モデルも含んでいる。Donna氏は、初期のアグロフォレストリー・プロジェクトから得られた成果が、この地域の他の場所でモデルとなるには、広く共有される必要があると付け加えた。

議論を通じて、登壇者らは一つの共通点に立ち返った。フランチャコルタの景観は固定されたものではありえないが、成り行きに任せることもできない、ということだ。彼らは、その未来は技術力、

長期的な計画、そしてブドウ畑、湿地、歴史地区、建造環境が一つの地域システムを形成しているという認識をより強く一般に共有できるかにかかっていると述べた。さらに複数の参加者は、若い世代の教育の重要性も強調し、学校教育と職業教育が地域の進路を左右するうえで鍵を握ると主張した。